

『欠点を長所にすると学力はグーンと伸びる』 陰
山英男 著

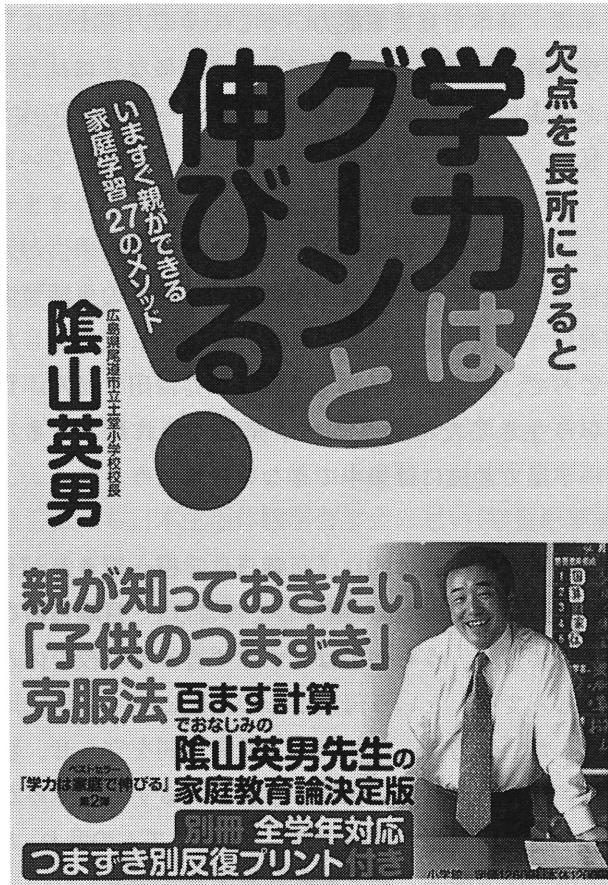
古賀, 倫嗣
熊本大学教育学部

<https://doi.org/10.15017/9076>

出版情報：生活体験学習研究. 6, pp.97-99, 2006-03-28. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

『欠点を長所にすると学力はグーンと伸びる』

陰山英男 著



この文章を読んでだれが書いたか、すぐにおわかりになられたでしょうか。「百ます計算」などの教育実践で有名な、陰山英男氏である。「学力低下」論の特集記事では必ずといってよいほど登場する陰山氏だが、同時に「学力の基礎は生命力にある」という信条の持ち主であることは、意外に知られていない。総販売数350万部というベストセラー、『徹底反復シリーズ』が教育実践論とすれば、本書は、その主体である子どもの発達を根っこで支える教育原理論といえるだろう。

陰山氏は、1958年兵庫県生まれ。兵庫県の朝来町立山口小学校で、14年間「百ます計算」、百人一首や音読など「読み書き計算」の反復練習による独自のプログラムに取り組み、卒業生がいわゆる難関大学に多数合格する成果をあげたことから教育界から注目されることになった。「山口小の奇跡」とまで言われた業績により、2003年4月、44歳の若さで広島県尾道市立土堂小学校校長に抜擢され、新たに「子供が伸びる『土堂メソッド』」の開発にあたっている。

ところで、「学習塾もない山間の公立小学校から難関大学に多数合格」というキャッチフレーズで出版された『本当の学力をつける本』は、陰山氏をいちやく「学力向上のスーパー教師」に祭り上げることになったが、その背景に当時、わが国の教育界を襲っていた「学力低下」批判の大合唱があったことはいうまでもない。

「学力低下」論は、新学習指導要領への改訂準備が進められた、1998（平成10）年頃から喧々囂々の議論となり、教育関係者だけではなく、政治家、経済人を巻き込んだ大論争と化した。発端は、京都大学経済学部の某教授が、分数の割り算ができない大学生がいると騒ぎだしたことにあるが、「公立中学校では難関大学に入学できるだけの学力がつかない」という、大手学習塾など受験産業の宣伝は保護者の不安を煽り、私立中学校志向を否応なく強める結果となった。

こうしたなか、1999年秋、当時文部省政策課長のポストにあった寺脇研氏と、苅谷剛彦東京大学助教授との3時間半に及ぶ「徹底討論」、「子供の学力は低下しているか」を掲載した、『論座10月号（朝日新聞社刊行）』は、教育界に大きな衝撃を与えることになった。公式には、子どもの「学力低下」を認めていない文部省の、教育改革担当課長がどのような見解を明らかにするか、そこに教育関係者の熱い眼差しが集中したのである。

あるとき、私はこんな相談をされました。

「共働きでどうしても、夜しか子供と話す時間がありません。親子の会話と子供の睡眠とどっちが大事ですか」と。

「もちろん、子供の睡眠の方が大事です」

私はこう前置きしたうえで、次のようにアドバイスしました。

「朝、いつもより20分でもいいですから、早起きして、朝食をとりながらお子さんと会話してください」

朝の時間を有効活用するようすすめたのです。時間は自分で作ろうとしなければ生まれません。そして作ろうとすれば必ず生まれるものです。

ここで、寺脇氏は、「瞬間的な学力」と「最終的についている学力」とを区別し、「中学3年卒業時点の学力は落ちると思うけれど、トータルに見たら（高校卒業、大学卒業など社会に出る時点では…古賀補足）、いまと変わらない学力を維持している」という認識を示した。さらに、新学習指導要領は「全員に共通して教えるミニマム（最低線）」と明言、その結果もたらされる学校教育の「地域間格差」、「階層差」に対応するためにも「社会教育の復権」が不可欠とまで述べた。

この対談は、バブル経済が終焉した後の学校教育が抱える課題を率直に問題提起したという意味では重要なものではあったが、「東京大学」卒業という「勝ち組」2人の頭からは完全に抜け落ちていたことが2つあった。まず1つは、「東京」以外の「地方」の教育現場の現実を踏まえた視点、もう1つは子ども自身の「生活」そのものを問いなおす視点である。それだからこそ、「地方」と「生活」を重ね合わせた陰山氏の教育実践が、受験エリート層の保護者だけではなく、子どもを持つすべての保護者に急速に受け入れられる結果となったのである。ただ、陰山氏の不幸は、「学力の基礎は生命力にある」という教育原理論ではなく、「陰山メソッド」という教育方法論で評価されたことであろう。

本書は、もともと2004年2月から9月まで、小学館発行の週刊誌「女性セブン」に掲載されたものである。女性を読者としていることから、とくに女性保護者が子どもに関わるハウツウを中心に「家庭学習27のメソッド」という提案になっている。全体の構成は、まず「塾に行っても成績が伸びない」、「漢字はできるのに作文は書けない」、「わからないと、すぐに投げ出してしまう」といった、27項目に及ぶ具体的な子どもの現状（「つまずき」）が示され、これに対して親が指導できるよう「働きかけ」の基本的な考え方が明示され、さらに巻末にある43ページに及ぶ陰山メソッド、「全学年対応つまずき別反復プリント」に実際に取り組むことによって子どもの学力向上がはかられ、あるいは問題点の所在が確認されるというものである。つまり、学力の「つまずき」を診断し、処方し、改善するという一連のプロセスが検証可能なかたちで、読者に伝えられる構成になっている。これに従う限り、教員免許とは無関係にどんな保護者でも子どもの家庭学習指導をスムーズに行うことが可能になる。つまり、学校教

員のみが独占してきた教授法が、すべての保護者にとって習得可能な学習指導法に組み換えられるという意味で、まさに「メソッド」なのである。

では、子どものつまずきの解決を考える上で一番重要なこととされているのは何であろうか。

基礎・基本を覚える能力、そしてその力を土台にして学ぶ喜びを感じることができるようになるにはどうしたらよいのでしょうか。

私は、何より子供が元気であることだと考えています。元気でなければ勉強しようという意欲がわきません。ささいなことにもくじけてしまいます。子供が元気に日々過ごすためには、勉強以前に毎日の生活習慣がたいへん重要になってきます。夜遅くまで勉強したところで、睡眠が不足していれば気力は出ません。食という生きるための基本が不十分であれば、エネルギー不足で勉強には集中できないでしょう。

このことを、具体的に「月曜日に学校へ行きながら」という第10章から紹介してみよう。「月曜日になると決まって、うちの子はぐずぐず言って学校を休みたがるんです」という母親からの相談に対し、陰山氏が下した「処方箋」はズバリ「就寝時間を守らせ、親子でジョキングを」。なぜか。学校をずるずると休みがちな子どもの問題の背後には、「生活リズムの乱れ」と「子供の体力低下」がうかがわれるからである。

もしお子さんが学校へ行くのを渋りがちだと思えば、生活リズムを一度見直してみてください。小学校低学年なら夜9時には寝かせることにしましょう。高学年でも10時が限度です。

生活リズムの乱れに加えて、忘れてはならないのが、年々低下する子供たちの体力です。世間ではそれほど真剣に受け止められてはいないようですが、深刻な事態に陥っていると私はみえています。体力の低下は、学力の低下以上に論じられるべき問題です。

体力、気力、学力は一体の力なんです。体力がないと、疲れやすくなり、学校へ行くのがしんどくなります。実際、金曜日になると熱を出すという子も最近目立ちます。週末まで体力がもたないんですね。これでは勉強に粘り強く取り組むことができません。

ですから、まずは子供に体力をつけてあげてください。特別な運動をしなくても、一緒に走るだけでも、散歩するだけでもいいんです。

走らせたり歩かせたりするのが、体力づくりのいちばんの近道です。……

力をつけるためには、お母さんの温かな応援が必要です。何の手だても打たずに、「嫌なら行かなくてもいいよ」とすぐに休ませてしまうのは簡単です。しかし、それで本当にいいのかどうか、そこをよく考えてください。

陰山氏の信条は、「何より子供が元気であること」。なぜなら、「元気でなければ勉強しようという意欲がわきません」。そのためには、「毎日の生活習慣」が重要であり、その核心は「睡眠」と「朝食」である。「つまずきを克服するためには、まず子供の元気を一番に考えてください」という、陰山氏の願い（教育原理論）は、私たち日本生活体験学習学会の思い（学習原理論）と、まったく重なるものである。しかし、逆にいうならば、私たちの研究・実践活動には生活体験学習原理

論はあっても、明らかにされるべきもう一つの課題、生活体験学習方法論が不十分のままに置かれてきたことを浮き彫りにしていると言えないだろうか。つまり、子どもの体験活動の「つまずき」を診断し、処方し、改善するという一連の評価プロセスを検証可能なかたちで作り上げ、すべての保護者や大人にとって習得可能な生活体験学習指導法に組み換える「メソッド」の開発が求められているのである。

陰山氏は、来年度から新設される立命館小学校副校長に着任が決まっている。小学校の新設により、立命館は小学校から大学院（博士課程）まで、21年間の一貫した教育課程を持つ学校経営を完成させることになる。これもまた、少子社会における「学校（大学）生き残り戦略」の一環であり、立命館は、慶応、早稲田に次ぐ「私立大学ナンバー3」の不動の地位を名実とも確立することになった。こうした「生き残り戦略」のなかに、あらためて陰山英男氏の存在の現代的意味をうかがうことができよう。

[小学館、2005年、1200円]

(熊本大学 古賀 倫嗣)